

親鸞聖人の求めた国

田中 智教

政治と宗教とは、今でこそ「政教分離の原則」で距離を置くべき関係ですが、実際には長い歴史の中で密接な関係を持ってきました。このたびの第48回衆議院議員総選挙は、安倍晋三内閣総理大臣の「国民の信を問いたい」という言葉から始まりました。その「信を問う」という言葉自体は真宗においても課題となる言葉ですが、それこそ人間の営みにおいて何を信じて生きるのかは普遍的なテーマでしょう。私たちは、過去の「日本」を検証し、未来の「国家」を創造する中で「自分の信とは何か」、改めて問われているような気がします。

親鸞聖人もまた「日本」や「国家」ということを意識されていたように窺えます。聖人のお言葉の中には「日本」「日域」、また「和国」「和朝」のように国家的にもとれる言葉、さらには「粟散」「片州」といった日本を見る世界観など、心のどこかで国、国土、国家、国民のあるべき姿を思念されていたのではないのでしょうか。

近代、親鸞聖人に影響を受けたいわゆる左翼的な思想家が現れる中、今年発売された中島岳志氏著作の『親鸞と日本主義』という本の中では、右翼的な思想への影響も指摘されます。この本がきっかけに「親鸞思想は、真宗は、東本願寺は、右なのか左なのか。保守なのかリベラルなのか」と話題になることもしばしば。つまり、親鸞聖人の教えを都合よく解釈すれば、右にも左にも傾く私たちということでしょう。

しかし、聖人が求められた国とはどちらに寄ることもない「御同朋、御同行」という世界観、それはまぎれもない「浄土」という国を求めたのでしょうか。冒頭で申し上げた自分の「信を問う」とは、それこそ親鸞聖人に背き続ける「自分の愚かさを知る」ことであり、このたびの選挙で確認すべき真宗門徒にとっての最重要課題であると思います。

(736 文字)